
青い錯覚

美由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い錯覚

【Nコード】

N2898B

【作者名】

美由

【あらすじ】

静かに淡い想いをよせる女の子の日々の断片。静かにでも確実に彼への想いは増してゆく。女の子は日々後悔の連続なのです。

彼は珍しく語気を荒げた。皆しんとしてしまった。彼が怒りを表にすることなんてめったに見たことがなかったから。

「とにかく、僕は暗記とかするんじゃないくて君達に考えてもらいたいんです。」

足の間に手を挟み込んで、いかにも寒そうに肩を縮めて言うのであった。彼の面持ちはいかにも上品である。

私はそんなすこしの外れな彼を気に入っていた。その上品さからは180度違う彼の行動はとても興味をそそるものがあつたからだ。黒いジャージをチョークの粉で真っ白に汚し、板書きをしているときに何回もチョークを折る。ま、彼の場合は砕くといった方がいいだろう。

そしてとつぴょうしもないことをさらりと言つてのけるのだ。

しかし、そのわりには話の内容がとても充実している。綺麗な日本語。綺麗な言い回し。綺麗な文。

彼はすこし違っていた。

「暗記ばかりしていたんじゃない、国語の点数がよくても意味ないんですからね」

私は彼の怒った素振りを見て改心しようと思った。なにしろ、クラスで一番態度が悪い女ですから。

それからして、テストも無事に終わった。
もちろんクラスで一番態度の悪い私は赤点とゆう、避けても避けきれない問題があった。
もちろん、言うまでもなく勉強なんてほんの一秒だっと思っていない。
しかし、でも、赤点をとって冬休みに学校に来てもいいと思った。
なぜなら、彼に会えるから。彼の授業があるから。そんな、淡い期待があった。

「三船：」

彼は何も言わずにテストを返した。

私はちよっぴり泣きたくなった。
胸のどこかが少し痛んだ。

彼はいつものように解説をはじめ。
私には関係がなくなってしまった、中身のない、解説。

「わざと間違えとけばよかった：」

彼の面持ちには相変わらず上品であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2898b/>

青い錯覚

2010年12月25日02時04分発行